2017 年　第三次・村山談話を継承する平和の旅

過去の事実と向き合う

2017/11

盧溝橋事件 80 年に橋の袂で（2017 年 7 月 18 日）

編集：訪問団事務局 / 発行：IFCC 出版会　〒162-0801 東京都新宿区山吹町 333 番地 辻ビル 405（TEL03-3268-4387 / FAX03-3268-6079）
頒価：40 0 円（送料込）

報告書　目次

報告書発行にあたって／団長　金子 哲夫　*1p*
731部隊罪証陳列館視察と幸存者の証言を聴取／井加田 まり *2p*
「七三一部隊」史跡を訪ねて／菅沢 裕明 *5p*
「九･一八レ歴史博物館」および「張作霖爆破現状」を視察して／今泉 克己　*7p*
撫順・平頂山惨案紀念館を訪ねて／金子 哲夫　*9p*
中国社会科学院近代史研究所/徐志民先生との意見交換／渡辺 英明 11*p*
友情あふれる旅の思い出／豊澤 正文 *13p*
資料
●村山内閣総理大臣談話
●旅の実施日程

資料

村山内閣総理大臣談話

「戦後 50 周年の終戦記念日にあたって」（いわゆる村山談話）

（平成 7 年 8 月 15 日）

先の大戦が終わりを告げてから、50 年の歳月が流れました。今、あらためて、あの戦争によって犠牲となられた内外の多くの人々に思いを馳せるとき、万感胸に迫るものがあります。

敗戦後、日本は、あの焼け野原から、幾多の困難を乗りこえて、今日の平和と繁栄を築いてまいりました。このことは私たちの誇りであり、そのために注がれた国民の皆様 1 人 1 人の英知とたゆみない努力に、私は心から敬意の念を表わすものであります。ここに至るまで、米国をはじめ、世界の国々から寄せられた支援と協力に対し、あらためて深甚な謝意を表明いたします。また、アジア太平洋近隣諸国、米国、さらには欧州諸国との間に今日のような友好関係を築き上げるに至ったことを、心から喜びたいと思います。

平和で豊かな日本となった今日、私たちはややもすればこの平和の尊さ、有難さを忘れがちになります。私たちは過去のあやまちを 2 度と繰り返すことのないよう、戦争の悲惨さを若い世代に語り伝えていかなければなりません。とくに近隣諸国の人々と手を携えて、アジア太平洋地域ひいては世界の平和を確かなものとしていくためには、なによりも、これらの諸国との間に深い理解と信頼にもとづいた関係を培っていくことが不可欠と考えます。政府は、この考えにもとづき、特に近現代における日本と近隣アジア諸国との関係にかかわる歴史研究を支援し、各国との交流の飛躍的な拡大をはかるために、この 2 つを柱とした平和友好交流事業を展開しております。また、現在取り組んでいる戦後処理問題についても、わが国とこれらの国々との信頼関係を一層強化するため、私は、ひき続き誠実に対応してまいります。

いま、戦後 50 周年の節目に当たり、われわれが銘記すべきことは、来し方を訪ねて歴史の教訓に学び、未来を望んで、人類社会の平和と繁栄への道を誤らないことであります。

わが国は、遠くない過去の一時期、国策を誤り、戦争への道を歩んで国民を存亡の危機に陥れ、植民地支配と侵略によって、多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多大の損害と苦痛を与えました。私は、未来に誤ち無からしめんとするが故に、疑うべくもないこの歴史の事実を謙虚に受け止め、ここにあらためて痛切な反省の意を表し、心からのお詫びの気持ちを表明いたします。また、この歴史がもたらした内外すべての犠牲者に深い哀悼の念を捧げます。

敗戦の日から 50 周年を迎えた今日、わが国は、深い反省に立ち、独善的なナショナリズムを排し、責任ある国際社会の一員として国際協調を促進し、それを通じて、平和の理念と民主主義とを押し広めていかなければなりません。同時に、わが国は、唯一の被爆国としての体験を踏まえて、核兵器の究極の廃絶を目指し、核不拡散体制の強化など、国際的な軍縮を積極的に推進していくことが肝要であります。これこそ、過去に対するつぐないとなり、犠牲となられた方々の御霊を鎮めるゆえんとなると、私は信じております。

「杖るは信に如くは莫し」と申します。この記念すべき時に当たり、信義を施政の根幹とすることを内外に表明し、私の誓いの言葉といたします。

（出典　外務省ホームページより

報告書発行にあたって

過去の事実と向き合う

第三次・村山談話を継承する平和の旅
団長　金子　哲夫

２０１７年を日中友好年とする訪問（第三次村山談話を継承する平和の旅）は、全国から７名が参加し、７月１４日から１９日の日程で実施しました。

抗日戦争記念館で（2017/7/18）

この旅は、２０１４年に社民党吉田党首が訪中して交流を深めたことを契機に、社民党とＩＦＣＣ（国際友好文化センター）の共催で翌年から実施され、今年で３回目を迎えました。

「２０１７年を日中友好年とする」ことには、大きな意味があります。

一つは、日本国内では、ほとんど報道されることはありませんでしたが、日中戦争が全面戦争へと拡大するきっかけとなった「盧溝橋事件」が発生して、ちょうど８０年目の年ということです。「盧溝橋事件」は、北京郊外の盧溝橋一帯で１９３７年（昭和１２年）７月７日夜に始まった日中両軍の軍事衝突のことですが、それはその後の日中全面戦争の発端となった事件でもあります。衝突の発端となった発砲については、今なお様々な説があり研究が続いていますが、ここで私たちが考えるべきことは、なぜ中国の国内に日本軍が駐屯していたのかということだと思います。

「平和の旅」は、二度目の中国東北地方の旅でした。私にとっても初めての東北地方訪問でしたが、いずれの地でも重い歴史の事実を突きつけられる旅となりました。

ハルピン（哈爾濱）では、７３１部隊罪証陳列館と史跡を視察し、幸存者（生存者）からの証言聴取。瀋陽では、十五年戦争の発端となり、「満州国」建設へとつながる９・１８事変（日本では、「柳条湖事件」と呼ばれている）博物館を見学し、住民の大虐殺が行われた平頂山殉難烈士記念館などを見学。どこも、日本人がどうしても向き合わなければならない場所でした。北京で訪れた抗日戦争記念館と盧溝橋事件跡では、「盧溝橋事件発生８０周年」を明示する大きな横断幕が掲げられていたことが印象に残ります。

もう一つの大きな意味は、今年が日中国交正常化４５周年の節目の年ということです。様々な企画が計画されているようですが、今一つ盛り上がりに欠けていると感じるのは私だけでしょうか。今回の旅でも、行く先々で「日本人観光客が来なくなった」という声をよく聞きました。残念ながら、現在の日中関係は、極めて深刻な状況と言わざるを得ません。そのことは、１７日に訪れた社会科学院近代史研究所の徐志民副研究員との「歴史認識についての意見交換」で感じたことです。徐氏は、「日本人は、この戦争についてどう考えているのか。それを知りたい」と言った上で、「戦争責任をはっきりさせることで、今後の平和への道が開かれる」との認識を示しました。ここに私たちが「村山談話を継承する」意味があるといえます。政府間の歴史研究について問われた徐氏が答えた「２０１２年の尖閣国有化問題、安倍政権の誕生でストップしたまま」という指摘が、今日の日中関係を端的に示しているといえます。

そんな旅を終えて帰国後感じたことがあります。８月６日、９日、そして８月１５日を迎え、テレビは、原爆や戦争に関する特別番組が多数放映されていました。そんな番組を見ながら私は、何とも言えない違和感を持ちました。それは特に戦争番組でです。確かに戦争の悲惨さは、強調され、最も尊い人間のいのちが軽んじられる戦争の本質を問うものとなっています。私が違和感を感ずるというのは、そのほとんどが「日本人は被害者」という視点で番組が構成されていることです。もちろん戦争が人間にもたらす悲惨な行為であり、特に当時の日本が、日本人のいのちすら軽んじていたことを強調することは大切です。しかしそこには、私たちが見てきたよ

中華全国青年連合会表敬。伍偉･副秘書長（左から４番目）と

うな、それ以上に中国人や他国の人々を差別し、命をいのちとも思わず犯した日本軍の侵略行為や虐殺行為の姿を見ることはできなかったからです。日本軍が、なぜアジアの国々を侵略していったのかという検証を見出すことはできません。それが私に違和感を持たせた理由です。

そんなことを感じながら、私は今回の旅を終え、改めて、歴史の事実と向き合う姿勢の重要性を学んだように思います。日常生活でもそうですが、加害者の記憶は、いつの間にか薄れていくものです。しかし、痛みを受けた被害者にとっては、いつまでたっても決して忘れることはできません。歴史を振り返るときにも、そのことは重要です。加害の歴史を忘れず、過ちを繰り返さないためには、きちんと「過去の事実と向き合う」ことだと思います。

その意味でも、この平和の旅が継続することを望まずにはいられません。

（広島／ IFCC 副会長）

日中戦争の歴史にまなぶ

７３１部隊罪証陳列館視察と幸存者の証言を聴取

井加田　まり

戦後 72 年、盧溝橋事件（1937 年 7 月 7 日、北京郊外で日本と中国が軍事衝突し、全面戦争に発展していった）から 80 年、日中国交正常化から 45 周年を経て、日中戦争の歴史を振り返る「平和訪問団」として、旧満州・中国東北部の戦跡を訪問する 5 泊 6 日の旅に参加しました。

731 部隊罪陳列館(2017/7/15)

羽田から 2 時間近く遅れて出発、北京経由でハルピンへ、２日目、ハルピンの「731 部隊罪陳列館、731 遺構」見学から中日戦争の傷跡めぐりの旅が始まりました。翌日高速列車で瀋陽へ、9.18 歴史博物館・撫順炭鉱・平頂山記念館を見学、その日は夜行列車で北京へ移動、中華全国青年連合会を表敬訪問、社会科学院では、歴史認識についての意見交換、最終日は北京市内の「抗日戦争記念館・盧溝橋事件跡」を見学、天安門広場から故宮へと、中国の空気に戸惑いを感じながらも、過去の侵略戦争の歴史を振り返る貴重な体験でした。

現在、日本と隣国である中国の関係は、「尖閣問題」や安倍首相の「歴史認識」をめぐり、あまり良い関係にあるとはいえません。安倍政権は、憲法 9 条改悪に向けて、従来の政府解釈を変更して集団的自衛権行使を容認、憲法違反の安保関連法（戦争法）を強行成立させました。「秘密保護法」を作り、「共謀罪」を強行に成立させました。
平和憲法の理念をないがしろにして、戦争をしない国から「戦争をする国」へと日本の戦後が変わろうとしています。そうした政治的背景が、近隣諸国との信頼関係を損ね、緊張関係を高める要因となっているのではないでしょうか。

私の父は 30 数年前に亡くなりましたが、子どもの頃の父の思い出は、父が海軍兵として戦争に駆り出された当時の体験について、大酒を飲んで酔っぱらっては聞きたくないことを話すということを繰り返していたことです。50 代後半に脳梗塞を発症し 67 歳で亡くなるまでさんざん苦労させられましたが、父から聞かされた戦争体験は今でも鮮明に記憶に残っています。

中国訪問は、重慶市（2008 年訪問）に続いて今回二度目の訪問ですが、父の体験から受け継いだ戦争体験者の苦しみや理不尽さの実態を改めて思い起こす機会となりました。戦争を知らない次の世代が再び戦争に巻き込まれることは絶対にあってはならないということを強く感じた訪中でもありました。

歴史の過ちを繰り返さないためにも、私たち自身が、父の世代の戦争体験を風化させないこと、過去の戦争の歴史に学ぶことが、戦争への歯止めにつながっていくのだと思います。

8 月 13 日、ＮＨＫドキュメンタリー番組で、旧日本軍の「731 部隊」（関東軍防疫給水部）を取り上げていました。戦後に旧ソ連が裁いた 731 部隊の軍事裁判の証言を収めたテープから、人体実験の事実が証言されており、歴史の事実が改めて明らかにされたといえます。

今回の訪問では「731 部隊罪陳列館」の館長さんとの懇談の機会もありました。館長さんは流暢な日本語で、研究者として日本に 40 回以上訪問し、日本の大学との交流や 731 部隊関係者などの聞き取り調査を行われたことを話されました。300 名の関係者のうち 70 名に実際に合うことができ、40 名から当時の事を聞き取ったことなどをお聞きしました。関係者に対し「歴史の事実を知りたい」と友人になる努力を積み重ね家まで行って証言してもらったこ

となど、信頼関係が出来た上での聞き取り調査を根気強く続けられてきたことに頭が下がる思いがしました。そうした活動から、中国政府が多額の資金を提供して歴史の事実を保存するために「731 記念館」を建設し、遺構整備も含めて 2015 年にオープンし、館長に就任したことなどを伺いました。

「金成民」館長さんの穏やかな人柄に触れ、好感をもってお話を聴くことができ、歴史の事実から目をそむけずに学ぶ大事さを確信することができました。

政府が冷静に平和的に外交努力を続けることが大事ですが、日中の研究者が歴史の事実を明らかにしながら、感情をぶつけ合うのではなく、冷静に歴史の事実を検証し乗り越えていくことが、さらに必要であり、大事なことではないかと強く感じました。

２０１７年7月１５日　１１時５０分～　（証言の聴取）

７３１部隊罪証陳列館及び史跡などを視察後、幸存者証言の聴取。

戦後７０年を機会にして、もう一度日中の歴史を学ぶ「第三次村山談話を継承する平和の旅」訪問団であることを、鎌田氏より紹介し、聞き取りに入る。

※左から、証言者の張作君（ﾁｮｳ・ｻｸ・ｸﾞﾝ）さんと娘の靖淑霞（ﾁﾞﾝ・ｼｭｳ・ｼｬ）さん

○証言者の自己紹介

私は「張作君」（チョウ・サク・グン）と申します。８１歳です。ご来訪を歓迎いたします。

当時、被害者家族として「平房郡」というところに住んでいました。夫の家族は合わせて１９人でペスト菌の感染により１２人の家族が、発病から２０日間たたないうちに全員亡くなりました。

私の夫は生き残りのひとりです。今も当時のことを思い出すと悲しかったと思います。

１９４５年８月１５日の敗戦の前、施設では、７３１部隊の証拠隠滅のために爆発したり燃やしたりいろいろなことをやりました。夫のその時の記憶によると、爆発の時の光は、４～５日続いたということです。また施設の中で出された動物には、ラクダ・馬・さる・ネズミなどもいっぱいいて、そのあと、１９４６年の末頃、ペスト菌が広がっていました。そして１００人ぐらいがうつされて死亡したのです。

○当時の施設周辺の村の状況

この周りの村は３つあります。後二道溝（コウニドウコウ）村では、２００名のうち、５０人が亡くなりました。東井子（トウイコ）村では、３００名のうち４０数人が死亡、義発源（ギハツゲン）村では、３００名のうち４８人が亡くなりました。２０日間で１００数十人が亡くなりました。

夫の家族は１９人いて、１２人が亡くなりました。同じ村の張さんという人がうつされて亡くなり、葬式に参加した夫のおじさんが葬式から帰ってきて、脇が腫れて３日間たたないうちに亡くなりました。

この情報が広がってから、村民はびっくりし、怖がり、なんでこういうことが起きたのか、恐怖の時を過ごしました。夫のおじさんの妻、子ども二人（長男５歳・長女２歳）も、うつされて５日間で亡くなりました。

同じ日に、夫のお父さんと、夫の姉・弟が亡くなりました。夫のお姉さんは、首が頭と同じぐらいの太さになって、息が苦しくて、目は閉じないまま、息が止まりました。

遺体を家まで運ぶ馬車が来ないうちに亡くなりました。弟の方は、話もできなくて、お父さんとお姉さんとも会うことができないまま、最後は黒い液を吐き出してから亡くなりました。

最初の段階は、周りの人は手伝う人もいたが、うつされるとの心配があって、次第に手伝う人がいなくなり、葬式は親戚で行いました。父と姉、弟を失ったその時の思いは悲しさでいっぱいだったと思います。周りに医者はいましたが、ペスト菌は手が付けられない状態でみるみるうちに亡くなった人が多かったということです。

次に娘さんのはなし

○靖淑霞（チン・シュウ・シャ）さんの話（張さんの娘）

昔の歴史を知ることを歓迎します。

父は、２００６年１２月５日に亡くなりました。父が亡くなる前に言いました。悲しい歴史を覚えておいて、知らない人に知らせるように、たくさんの人にもっと７３１の起こした罪を広めるようにと言いました。父の家族は、村で一番亡くなった人が多かった家族です。

父の一番下のおじさんは、村民の葬式を手伝って、５日間以内に家族４人とも全員死亡しました。ペスト菌が原因であることは知りませんでした。

当時、おじいさんとおばさんとおじさんが同じ日に亡くなりました。たくさんの人が亡くなったので、遺体を置く場所もなく、どうしようもなくて、おばさんは苦しんだまま外の小屋の中に放置され、そのまま亡くなりました。

家からなくなった人を運ぶ馬車が来ないうちに、

おじいさんやおじさんも亡くなりました。

生きている人が死人の面倒を見れずに悪臭がしたということもいっぱいあったということです。１日に３人連続してなくなり、皆は悲しくて恐怖の中でどういうことか、わけがわからなかったということです。そのとき、近所の学校の先生が政府に報告しました。

そして、医療チームが派遣されてきて解剖や検査などが現地調査で行われ、最終的に、７３１部隊が残した“ペスト菌”が原因であることが確認されました。

○質問に答えて

・１９４６年８月頃に始まり、８月末頃が最悪で、年末まで続きました。
政府から医療チームが派遣され、１０月頃に“ペスト菌”が確認され、施設から逃げた動物が原因で感染が広がったと確定されました。

・張さんの夫はその当時１２歳、張さん（証言者）は９歳でした。夫は、おばあさんの死んだ顔を覚えていて、目を閉じないまま亡くなった悲惨な場面を見ています。元気な人が亡くなりお年寄りと子どもだけが残りました。

・おばあさんは、悲しくて毎日のようにお墓で泣いていたので、泣きすぎて失明しました。そして亡くなったのです。

・証拠はたくさんあります。政府の人たちは作業服を着て検査を行い、ペスト菌と判明してから、うつされていない人を隔離し防疫などの処置をとりました。また、うつされた人の治療に当たりました。歴史は忘れられません。

・「平房郡」というところに住んでいましたが、近隣の３つの村のうち、夫が住んでいた後二道溝（コウニドウコウ）村がもっとも被害が大きかったところです。政府が立ち入り禁止区域としました。

・７３１施設が爆破された時に近い村では施設近くまで、見に行ったりしたことがあったようですが、爆破直後から一年ぐらいは何も起こらずに過ぎていました。被害は、１９４６年８月に発生しました。

・当時は、ネズミやノミなどもいっぱいいて、長い靴下とか長靴をはくように、政府から言われました。逃げた小動物が繁殖して、菌汚染が広がったことが考えられます。

・父の話では、夜中にネズミがトウモロコシをかじる音が聞こえるほどで、オシッコの時などにネズミにかけると白いノミが見えるくらいにいっぱいいたとのことです。

・終戦後、当時情報がない中で政府の調査が行われました。建物が１９４５年に破壊されており、影響調査は、１９４６年８月の感染被害を契機に調査が進められました。以降、政府の調査はずっと続いています。

・爆発前まで、日本軍の施設で何が行われていたのか、何の施設なのか知りませんでした。秘密事項でした。犠牲者が出て初めて調査が行われ、昔働いていた人の証言も聞き取りされましたが、働いていた人も何の施設なのかは知りませんでした。“マルタ”を運ぶのが仕事で、何に使われるのかは知らなかったのです。

・戦後７３１部隊の跡地は、空地のまま放置されていましたが、残った施設は１９８０年代～１９９０年代頃は、小学校や民間施設として使われていました。１９９０年代から研究施設として保護し、復元して保存するようになりました。１９９０年代前は、調査のための資金もなく放置されていました。

・当初は、石井司令官の１室のみが７３１資料館となっていました。施設の保護政策によって、民間住宅や小学校などを移転し、復元しています。ボイラー室前の線路は、当時のものですが、保存前は工場への搬送に使われていました。

・７３１部隊罪証陳列館として、２０１５年８月１５日に、現在の新しい資料館として整備されました。

（富山県議会　議員）

聞き取りを終えて、記念撮影

反戦平和・日中友好の想いを新たに

七三一部隊史跡を訪ねて

菅沢　裕明

はじめに

私は 1941 年（昭和 16 年）生まれ。終戦時４歳ですから、リアルな戦時中の生活体験の記憶はないと言っていい。ただ、断片的な記憶として、1945 年８月２日未明の富山空襲（３千名近くの死者）を自宅前の道路（海抜のある山地）から海越えに赤く燃える光景を見ていたかすかな記憶がある。そして、終戦直後に戦地「満州」から帰宅した父の弟（２人の叔父)が家に居たこと。終戦直後からの 10 数年は、小・中学校の少年時代だが、あの戦争の現場で起きたことについて、両親や叔父、教師、地域の人たちが話をしていたであろうが、記憶には残っていない。戦後復興の真っ直中で、日常の生活再建に懸命の社会情勢ではなかったか。

私が「反戦・平和」への意識を持つようになったのは、多分私たちが受けた戦後教育の下地に、平和憲法に基づく学校教育があったことや、学生時代に憲法のゼミに参加したこと、卒業後に自治体労働者になって、1970 年代の護憲・平和運動（安保闘争・ベトナム反戦、反核・平和運動など）に参加するようになったことにある。そして今、戦後 70 数年が経過する中で、中国などを「仮想敵国」扱いする安保法制（戦争法）が強行され、改憲が声高に主張される時代となっている。改めて、終戦 50 年にあたって率直に戦争責任を認め、謝罪した「村山談話」の意義を再確認し、これからの活動に生かしたい。その中で、今回の訪中（７月 14 日～ 19 日）で、特に七三一部隊史跡を訪ねる機会を得たことは、私自身の歴史認識を深め、反戦・平和、日中友好への想いを新たにする良い経験であった。

戦争の本当の恐ろしさ、残虐さを七三一部隊に見る

（１）私の「七三一部隊」認識

私の七三一部隊についての認識は、ずっと以前に読んだ作家森村誠一の「悪魔の飽食」（角川文庫）や岩波ブックレット「七三一部隊と天皇・陸軍中央」（吉見義明･伊香俊哉著）で読んだりした記憶であり、ぼんやりしたものでした。特に、「悪魔の飽食」は、記述内容の残虐、残酷さに途中で読むのを止めた記憶がある。今回の訪中を前に再度挑戦し、文庫本３冊を読み通したが、戦争の本当の恐ろしさ、残虐さを七三一部隊に見るおもいであった。作者の森村誠一もこの本は「実録」であり、「執筆中、あまりのむごたらしさに何度かペンを握る手が凍りつき、『丸太』の哀れさに涙を禁じ得なかった」と「終章」で書いている

今年の夏には、いくつかの新聞が日中戦争再考の

金成民･館長（左から４番目）から話を伺う

意義を説いていた。その中で、ＮＨＫが「七三一部隊の真実」と題して、七三一部隊と医学者との結託を特番に組んで放送した。私は７月の訪中後でもあり、大きな関心を持ってテレビに釘付けになった。ただ、私の周りではこの番組が人々の関心を大きく集めたとまでは言えなかった。

また、今夏、日本近現代史の優れた学者・研究者である笠原十九司氏（元宇都宮大学教授）の「日中戦争全史（上・下)」（高文研）が出版された。私は、氏の「南京事件」（岩波新書）や「日本軍の治安戦（日中戦争の実現)」（岩波書店)、「海軍の日中戦争」（平凡社）を興味深く読んできたが、今回の本は長らく戦場とされた中国で日本軍が何を行っていたかについて、日本人として知っておくべき歴史が「全史」という形で全面展開されている。私にとっては訪中の後でもあり、一気呵成に大きな感動を持って読み通した。この本の中には、七三一部隊に関する記述もあり、人体実験と細菌兵器の製造、使用についても言及されている。

（２）ハルピン郊外「平房」に立つ

７月 14 日（金）午前に羽田空港を出発、北京経由で夕方には中国吉林省ハルピン市に到着。翌朝ホテルから専用車で 40 分足らずで市郊外の平房にある「侵華日本軍第七三一部隊遺跡」に着いた。気候は、真夏の太陽が照って暑いが、湿度が低いのかカラッとしている。ポプラの高木が所々に木陰をつくる。ここが「七三一部隊」の本拠かと緊張が走る。見学者は、学生・生徒らしい姿があるが、多くはない。遺跡は 25 万平方メートル、東京ドーム５個分位の広さである。この中に、「侵華日本軍第七三一部隊罪証陳列館」（「歴史記念館」）の巨大な建物がある。他に、七三一部隊が宿舎や事務所として使った本部建物（石井四郎部隊長の執務室があった）が保存され、七三一部隊が撤退する時に爆破した建物のボイラ跡、ペスト菌を培養するために使うネズミの飼育室などの廃墟、冬のハルピンは昼でもマイナス 20 度の寒さだが、生体による残酷な凍傷実験室跡が残っていた。

ソ連の対日参戦によりソ連軍の満州侵攻が開始され 1945 年８月９日、陸軍中央より証拠隠滅のため七三一部隊の建物の徹底破壊が命令されたが、ソ連軍の侵攻が早かったため廃墟のような姿を残している。現在も遺跡の発掘作業・整理が慎重に進められており、何れ「世界遺産」への登録を目指していると、案内人から説明があった。

（３）ハルピン「平房」で見たこと、考えたこと

①七三一部隊、「罪証陳列館」

平房の広大な遺跡の中に、「侵華日本軍七三一部隊罪証陳列館」があり、2015 年８月に巨大な新館が完成し公開されていた。七三一部隊の遺跡は 1982 年から中国政府の管理下におかれ、2006 年に「全国重点文物保護施設」となり、「国家国防教育基地」（国民の歴史、愛国教育機関）に定められている。陳列館の展示は、日本軍による細菌戦、七三一部隊、人体実験、細菌兵器開発、細菌戦実施、証拠隠滅と裁判の６ブースに分けて膨大な数の資料が展示されていた。

七三一部隊は、司令官の名前をとり「石井部隊」とも呼ばれた。生物兵器開発の機関としては、1932 年８月に石井四郎が中心となって東京の陸軍医学校内に「防疫研究室」が開設されていた。「満州国」ができると、日本国内ではできない人体実験やさまざまなことが特権をもって実施できることを利用して、1933 年にハルピン郊外に部隊を設立して活動を始めたのである。1940 年８月には、こうした機関が「関東軍防疫給水部」に拡大・改編され、日本陸軍における細菌戦の研究と実験、細菌兵器の製造、そして細菌兵器の実戦使用の指導機関になった。

七三一部隊では、細菌兵器の効果を確かめるため「生体解剖」、つまり生きた人間を解剖するなど残虐行為を行い、この実験のため約 3,000 人の中国人、朝鮮人、ロシア人などが犠牲になった。彼らは丸太（マルタ）と呼ばれ、生きた人間を切り刻むことには誰でも抵抗があるが、人間ではない材料、「マルタ」と思えば気になるまい、と考えたからだという。陳列館の膨大な展示物や写真類、収集された被害者・関係者の証言によって、七三一部隊の残虐性が余すところなく事実で証明されている。陳列館見学の後、面談できた館長は、資料・情報の収集のために何度も日本を訪問していることや、展示には科学・学術の観点を大事にし、事実の検証、展示の充実に力を入れていると語っていた。

七三一部隊の存在は、日本では終戦後長い間、国民には知らされていなかった。司令官石井四郎が終戦と同時に平房の施設を破壊、生き残ったマルタ、使用人など 400 余人を毒ガスで殺害し、部下に秘密保持を約束させ、研究資料を密かに東京に持ち帰ったからである。部隊の存在が明らかになったのは、ソ連軍に連行された隊員の自供からだった。ソ連は、この部隊を東京裁判で裁くよう米国に求めたが、米国は石井を探し出し、免罪を条件に実験資料を手に入れ、秘密裏に処理してしまった。日本では森村誠一の「悪魔の飽食」など、いくつかの出版物で部隊の全容が明らかにされている。しかし、教科書記述などの学校教育での取り扱いは極めて不十分で、国民の七三一部隊について歴史認識は真実から遠く離れている。平房の罪証陳列館を見学して、日中間の歴史認識、歴史教育の大きな格差に、改めて衝撃を受け考えさせられた。

25 万平方メートルに及ぶ 731 部隊跡の中核保護区

この七三一部隊は、北京・南京・広東など中国各地 10 ヵ所をこえる支部を持ち、石井機関は全中国にまたがる大組織に成長していった。そして、日本軍は七三一部隊の製造した細菌兵器を中国各地の作戦で使用し、ペスト・コレラなどの感染で広範な地域に膨大な犠牲者を出した。私は、一昨年の訪中で、日本軍の毒ガスで数百人が虐殺された河北省定州市北坦村を訪ねている。既に数が少なくなっている幸存者（九死に一生を得た人）と交流してきた。毒ガスや細菌兵器まで使ってなりふりかまわず殲滅しようとする日本軍の残虐な本質がむき出しになっている。

②医師・科学者たちの組織犯罪

七三一部隊の存在は、ナチス・ドイツのユダヤ人虐殺にも匹敵する戦争の本当の恐ろしさ、残虐性を明らかにしている。この七三一部隊の中核を担ったのは、部隊長（1936 年～ 42 年、45 年３月～終戦するまで）石井四郎（京大）、第２代部隊長（42 年～ 45 年２月）北野政次（東大）など有名大学卒業の医学者などで、その総数は 200 人以上となっている。当時の日本の細菌学、血清学、伝染病学、昆虫学、動物学、植物学等の専門家であった。こうした日本社会の知識人、エリートたちが人体実験と細菌戦の罪悪行為を行い、人間性と尊厳、生命と倫理、医学の根本原則と医学者のモラルを完全に無視したのである。

七三一部隊罪証陳列館では、こうした医学者たちの罪状が厳しく糾弾され、顔写真・学歴・行状などが大きく掲示され告発されていた。これらの医学者

多くの人体実験室跡が保存されている。写真は凍傷実験室跡

たちは、終戦間際のソ連の対日参戦の際、七三一部隊の建物を徹底破壊、特殊監獄に収容の「マルタ」400 余人を毒ガスで殺した後、満鉄の特別列車で優先的に撤退帰国している。そして、連合国軍総司令部（ＧＨＱ）が調査データを全てアメリカに提供することを代償に、極東国際軍事裁判（東京裁判）において免責することを決定。そのため、石井四郎ら七三一部隊の幹部、隊員らは戦争責任を追及されることなく戦後を生きたのである。陳列館の展示では、これら医学者たちの戦後についても、日本の現地調査に基づく詳細な経過が展示されていた。悪魔の外套を脱ぎ捨て、日本の政府機関、医療機構、学術機構、大学等の社会の各領域で公然と重職に就いた、と告発されていた。その中に、戦後金沢大学学長に就任した医学者の記録もあり、強く印象に残った。

中国の戦場で日本軍が行った残虐行為・戦争犯罪の数々。七三一部隊、毒ガス戦、南京事件、重慶無差別爆撃、強制連行・強制労働、日本軍「慰安婦」などに真正面から向き合い、正しい歴史認識を日本国民の中に広げ、それらをなかったことにしようとする歴史修正主義への事実に基づいた反撃が重要になっている。

松花江のほとりで想ったこと

平房からハルピン市街に戻り土曜の午後のひと時、松花江のほとりを散策できた。松花江は、中朝国境の白頭山に源を発し、吉林、ハルピンを通過して黒竜江と合流してオホーツク海に注ぐ大河である。「満州国」や日本陸軍の侵略と破壊の歴史をその川面に映してきた。ハルピンの市街は松花江に寄り添う形でつくられているが、この川は市民に憩いの場所を提供している。私たちが散策した江華公園は、長さが 2,000 メートル、幅員が 50 メートルの大きなもので、土曜日の午後ということもあって多くの市民でにぎわっていた。盛夏には 1 日 20 万人を超える市民が集うという。この日もカラフルな服装が目立ち、集う人たちの表情も豊かで、歌や踊りを楽しむ姿に、中国社会の発展を感じた。

日中間には、現在東シナ海の島嶼問題など政治レベルの深刻な対立があり、歴史認識でも日本政府の偏向を正していかなければならない。今こそ、村山談話の精神を尊重して、日中友好を実践する時である。松花江のほとりを散策し、中国市民の姿に接し強く想った次第である。

（富山県議会　議員）

「昭和」とはどんな時代であったのか
「九・一八歴史博物館」および「張作霖爆破現状」を視察して

今泉　克己

日本軍は爆破地点に碑を建てた。現在は倒され展示されている

私は自分が生きてきた「昭和」とはどんな時代であったのか、自分なりに見つめていきたいと思い続けている。

また、城戸久枝さんの「あの戦争から遠く離れて・・・私につながる歴史をたどる旅」（２００７年９月、情報センター出版局）を読んで、中国残留孤児として生き抜き日本に帰ってきた父親の生きざまを見つめていくことで、自分と中国、日本社会と中国社会の関係性を見つめていく著者・城戸久枝さんの歴史を見つめる姿勢に感動した。

そのような思いがあり、今回の平和の旅に参加した。中国東北部（戦前の「満州」）での状況はどうであったのか、少しでも直接見ておかねばならないとの問題意識をもって参加した。

私の担当は次の２件であるが、施設、事件現場の状況を、その歴史的背景に少し触れて報告したい。

「九・一八歴史博物館」

柳条湖事件（１９３１年９月１８日、中国では「九・一八事変」）を契機として、日本軍は中国東北部の三省を占領し翌年には「満州国」を打ち立てた。また、国際連盟の派遣したリットン調査団報告の採択をうけて日本は国際連盟を脱退し、１９３７年７月の「盧溝橋事件」から中国大陸全土での民衆の反日独立闘争に直面していく。

この中国をはじめアジアの人々に多大な犠牲を強いた

無謀な侵略戦争につながっていった柳条湖事件をしっかりと学んでいかなければならない。そんなことを感じさせる博物館だと思った。盧溝橋で見学した「歴史は最良の教科書であり、

最良の目覚まし薬である」（中国人民抗日戦争紀念館）との言葉が印象に深く残る。

柳条湖事件は満州事変の発端となり、中国においては、日本による中国侵略の象徴的事件である。博物館は満鉄爆破地点である柳条湖に、１９９１年9月１８日、満州事変６０周年を機会に九・一八事変博物館としてオープンしたものだ。１９９９年に新館ができてから九・一八”歴史博物館となる。

展示内容は非常に大規模なもので日中戦争の歴史、実態や民衆の抵抗と勝利の過程が分かりやすく展示されている。残念なことに十分な時間がなく、駆け足で見て回ったような気がする。また、じっくり時間をとって訪問してみたいものだ。

張作霖爆破事件現状

張作霖爆殺事件は、１９２８年６月４日、瀋陽市近郊で、日本の関東軍によって張作霖が暗殺された事件。爆殺現場は２本の線路が交差する地点。現場の線路は現在も活躍しており、張作霖の列車が大破した下の線路は瀋陽北駅から北京に向かう高速電車などに使われ、上の線路は瀋陽駅から吉林方面に向かう列車などに使用されている。上下線の交差付近の斜面上に「皇姑屯事件」（こうことんじけん）と事件跡を示す石碑があるとのことだが、鉄道施設内で現在はフェンスで囲われているため、どうなっているのか外側から見ることはできなかった。

事件の概要は次の通り。張作霖の乗る特別列車が、当時の奉天（瀋陽）近郊、皇姑屯の京奉線（けいほうせん）と満鉄連長線の立体交差地点を通過中、上方を通る満鉄線の橋脚に仕掛けられていた火薬が爆発した。列車は大破炎上し、交差していた鉄橋も崩落した。張作霖は両手両足を吹き飛ばされた。奉天城内の統帥府にかつぎこまれたときには絶命していたが、関東軍に新政府を作らせまいと６月２１日に発表したとのこと。

この企画を大事に

「村山談話を継承する平和の旅」は今回で３回目であった。村山談話は 1995 年、戦後 50 周年を機会に出されたものであるが、この平和の旅は、まだ３回目である。もっと早くから取り組まれなかったものか、と疑問に思ったりもするが、しかし、私自身も今回の旅に参加してこの旅のことを知った。

東アジアでの武力衝突、戦争の危機を本気で心配しなければならない時期を迎えている現在こそ、社民党は、このような企画を大事にしていかなければならないと痛感している。

（社会民主党熊本県連合　幹事長）

張作霖爆殺事件跡碑は高速鉄道防護壁で見られなかった

持参した折り鶴を捧げる

撫順・平頂山惨案紀念館を訪ねて

金子　哲夫

遺骨館で慰霊献花し黙祷を

瀋陽到着後、２番目に見学した「撫順平頂山惨案記念館」（発掘された遺骨は平頂山殉難同胞遺骨館という別棟にある）に到着したのは、閉館間際だった。そのためか、紀念館周辺には人影もなかった。しかし、そんな遅い時間にもかかわらず、

記念館入り口では、若い女性ガイドの王媛媛さんが、私たちを待ち受けてくれており、一人ひとりに館内案内音声ガイドが手渡された。私たちは、その音声ガイドを片手に、早速館内の見学を開始した。

紀念館は、大きな広場の正面に２００７年にリニューアルされた３つの展示ホールを持つ「撫順平頂山惨案紀念館」と、そこから小高い丘を隔てた反対側の長い階段を下った先にある「平頂山殉難同胞遺骨館」、そして両館の中間にある小高い丘の頂に建立された「平頂山殉難同胞記念碑」によって構成されている。

最初に「平頂山事件」について、説明しておきたい。ここでは、全てを詳細に述べることはできないので、到着時に手渡された「紀念館案内資料」の日本語文を原文のまま記載することにする。

――日本帝国主義は、1905年の日露戦争で帝政ロシアに勝利したことをきっかけに、撫順炭鉱の採掘権を奪い、他の工業資源も奪い始めた。1931年、日本の関東軍は、『九・一八』事変を企て、撫順を含む東北地域を侵略し、東北地域の人民に対し残酷極まりないファシズム植民統治を実施、狂気的に経済的略奪を行った。

日本帝国主義による武装侵略は中国人民の猛烈な抵抗に遭う。亡国の奴隷となることに抵抗し、東北人民は次々に武器を持ち、いたるところで侵略者に反撃した。抗日の烽火（のろし）は、東北全土へ広がった。

1932年9月15日（旧暦8月15日、中秋節）深夜、遼寧民衆自衛軍は、三方に分かれ、撫順炭鉱を占領していた日本人を襲撃し、敵に強烈な打撃を与えた。

自衛軍の攻撃に遭った日本の侵略者らは、自衛軍が通過した平頂山村、栗家溝村、千金堡村の村民らが、自衛軍による日本人襲撃の際にそれらを報告しなかったことから、村民らを”通匪“（匪賊のスパイ）と決めつけ、村ごと燃やし尽くすという残忍な手段で報復することを決定した。東北人民を震え上がらせ、抵抗を阻止しようとしたのである。

9月16日午後、日本守備隊、憲兵隊、警察署、炭鉱防衛隊の数百人が出動し、平頂山村を包囲し、一軒一軒家をまわり村民（馬、鄧両家の8人と他の二つの村民は運よく隠れることができた）を村の西にある平頂山のふもとに集合させた。そして火を放ち村中の家屋を燃やし、山のふもとに集まった3000人の武器を持たない老若男女を銃撃した。にわかに、叫び声と泣き声、罵声と銃声がひとつになり、人々は叫びながら一列、また一列と倒れ、折り重なるように死んでいった。暴れて逃げようとする若い青年らもいたが、日本軍の包囲を突破することはできなかった。銃撃の後、人心を失い鬼と化した日本人は銃剣で、まだ息絶えていない者を刺してまわり、妊婦や幼い子にさえ容赦しなかった。虐殺は3時間に及んだ。午後4時頃、日本軍は平頂山村近くの栗家溝村、千金堡村に入り、逃げ遅れた200人余りの人々を虐殺し、村中の家屋と家畜を焼き払った。この三村で100人余りの人が逃れられた以外、3000人以上の人々が日本軍の虐殺で惨死した。虐殺の後、日本軍はガソリンと坑木で死体を焼却し、焼却しきれなかった死体を平頂山の下に埋めた。これが世界を震撼させた平頂山虐殺事件である。

しかし日本軍の虐殺で、東北人民が震え上がることはなかった。彼らは侵略者と徹底的に戦い、ついに抗日戦争は勝利した。――

以上が案内資料に記載された事件の概要である。付け加えれば、今年は「平頂山事件」が発生して、８５年目の節目の年でもある。

今度は、日本で活字となったものから引用する。私の手元にある「平頂山事件とは何だったのか」（後述する「平頂山事件訴訟」の弁護団編著　高文研　２００８年８月１５日発行）には、だましながら住民を強制的に連行し虐殺した様子が、記載されている。

――9月16日午前、独立守備隊の兵士および憲兵隊は、

機関銃などの装備を整え、数台の乗用車及びトラックに分乗して、平頂山へと向かった。平頂山の集落に到着後は、『記念写真を撮る』『匪賊の攻撃から住民を守る』などとだましたり、あるいは銃剣を突き付けて実力で屋外に出すなどして、平頂山の住民を南西の崖下に追い立てた。そして住民たちは、老若男女を問わずすべて崖下に集められ、日本兵が用意した数丁の機関銃の一斉掃射により殺された。機銃掃射を終えると日本兵は、累々と重なりあい倒れている住民の上を隊列を組んで歩きながら、息のあるものを見つけると、容赦なく銃剣で突き刺してとどめを刺した。さらに、平頂山の集落に火を放ち、集落そのものを消し去った。翌9月17日、日本兵は虐殺現場に残された死体の山にガソリンを撒き、これを焼却した。ダイナマイトで崖を崩し、土砂で死体の山を覆い隠した。――

こうして日本軍は、手を尽くして隠蔽しようとしたのである。しかし、翌日（当日夕方から雨が降り日本軍はいったん引き揚げる）にガソリンで遺体を焼き尽くすまでの間に、当時４０人くらいの生存者が生き残っていたのである。しかし、現在まで生き残っている生存者は、わずかに１名となったと教えられた。もちろん今回の訪問で生存者から直接当時のお話を聞くことはできなかった。

ここで紀念館の歴史を振り返っておきたい。前述の「紀念館案内資料」によると「１９５１年４月５日、撫順市は平頂山において公葬を執り行い、平頂山虐殺受難者を追悼し、『紀念碑建設』を決定。」「７０年夏、遺跡発掘を開始し、被害者らの遺骨を掘り出す。」そして「１９７２年９月１６日、遺骨を保管・陳列し、参観者が供養できる場として『遺骨館』が開館」されるという経緯をたどり、２００７年にリニューアルされて、現在に至っているようである。

ここからは「紀念館を訪れて」の様子を記載したい。

先にも述べたように今回の訪問は、閉館間際ということもあり、音声ガイドによる見学となったので、細かくその様子を述べることはできない。しかし、なんといっても強く印象に残っている場所は、「遺骨館」である。７０年夏の発掘調査によって掘り出された遺骨約８００体が当時のままの状態で、遺骨の風化を防ぐガラス越しに、保存されている。

遺構の長さは、８０メートル、幅は５メートルくらい。１メートル四方に８体の遺骨。

一番下に２人の子どもの遺骨、そして真ん中は女性の遺骨、一番上が男性の遺骨。家族と思われる。母が子供をしっかりと抱きしめたまま殺された遺骨。背中を寄せあって殺された兄弟の遺骨。

息をのむような光景が目に飛び込むが、だからこそ目を背けずに向き合わなければならないと改めて痛感させられる。

私は、パートナーが折ってくれ広島から持参した折り鶴をこの部屋の手すりに結び、捧げた。そしてこの遺骨館のロビーで、団全員で追悼の献花と黙とう。１時間余りの「撫順・平頂山殉難烈士紀念館」の見学は終わった。誰もが言葉もなかった。

平頂山事件は、戦後補償（対日賠償請求）裁判の一つとして、１９９６年８月１４日、被害者３名により東京地裁に提訴された。２００２年６月の一審判決では、虐殺の事実は認定されたものの、「国家無答責（国の損害賠償の根拠となる法律が存在していなかったので、損害賠償責任は負わない）」論で、敗訴となり、２００５年５月の二審判決も一審を踏襲、そして２００６年５月１６日最高裁が、上告棄却を決定し、被害者への謝罪も救済もないまま、裁判闘争は終結した。

しかし、平頂山の住民虐殺現場の遺骨は、裁判においても隠すことのできない歴史的事実として認めざるを得なかったのである。

この事実と向き合うことの大切さを、今回の訪問でも改めて認識させられた。

見学を終え瀋陽へ向かう途中で、この事件が引鉄ともいえる広大な撫順炭鉱の露天掘り跡を見学した。

（広島原水禁代表委員）

持参した折り鶴を捧げる

中国社会科学院近代史研究所で

～徐志民先生との意見交換～

渡辺　英明

意見交換を終えて徐先生と（左から３番目）

７月１７日１４時５０分より約１時間半にわたり、徐先生と日中両国民の歴史認識について意見交換を行なった。以下はその記録であるが、字数の関係で発言を一部要約してあることをお断りしておきたい。

【徐志民先生の略歴】

山東省曲阜師範大卒。０４年～０７年　北京大学歴史学部で研究活動。途中０６年に東京大学に留学、博士論文のテーマは「中国人留学生に対する日本政府の政策」。０７年～０９年　チベット社会科学院で学生養成の仕事。２０１１年に北京に戻り、１１年９月～１２年３月まで日本大学国際関係学部で研究活動。現在は中国社会科学院近代史研究所の准研究員として「抗日抗争研究」の編集を担当。中国革命史研究室の副研究室長も務める。

【金子団長挨拶】

１４日に日本を出発し、今朝北京入りした。１５日にハルビンの７３１部隊罪証陳列館、１６日瀋陽の９・１８歴史博物館と撫順平頂山惨案紀念館を見学してきた。私たちは９５年の村山談話を継承し、正しい歴史認識を持ち、日中友好に役割を果たしたい。今年は盧溝橋事件から８０周年という節目の年であり、今次訪中は重い意味を持つと考える。研究者の視点から徐先生にお話を伺える機会を作っていただき感謝したい。

抗日戦争研究の意味

【徐志民先生からのお話し】

１．今年は抗日戦争８０周年という特別な年で、中国でも日本でも色々なイベントを行なった。中国では「７・７事変」というが、日本では「盧溝橋事件」という。両国にとって重要な課題である。中国と日本で違う意見があり、認識の違いもある。日本の資料を見ると、盧溝橋は中国が挑発した事件だと言う人もいる。しかし、中国が計画して挑発して起こした事件ではない。和平城の城壁には日本軍が発砲して付けた大砲の跡が残っている。

２．私は日本の色々な戦争資料館を見て回った。特に印象的だったのは、沖縄の資料館だった。犠牲者２２万人ということで、その悲惨さがすぐ分かった。私は「日本が起こしたあの戦争を日本人がどう考えるのか」が知りたくて、この本（「戦後日本人的戦争責任進退研究」を書いた。中国人は、日本人は、そして世界の人たちはあの戦争をどう考えるか、それがよく分かれば、平和を促進するための役割を果たす、その方向が見えるのではないかと思う。福島の白河にアウシュヴィッツ平和博物館がある。その中に小さな７３１博物館がある。それを見て感動した。中国でも日本でも昔の歴史を記念して、悲惨な歴史を繰り返さないように頑張っている。

３．この「抗日戦争研究」という雑誌は９１年に最初に発刊した。なぜかと言うと、８０年代から日本の有名人たちが靖国参拝を始め、戦争に対する認識に違うところが多く出るようになった。社会科学院としては、世の中の人たちに正しい認識をもってもらうためにこの雑誌を作り始めた。０６年から２０１０年まで歩平元所長がリードして、多くの専門家が集まり歴史について研究した。その時の学者たちの発表した論文が入っている。この雑誌は、中国、日本、米国、ヨーロッパで発表された。

歴史教育・賠償請求問題などで意見交換

（菅沢副団長）

日本の公教育における近現代史の教え方は不十分である。平頂山事件も教科書に出ていない。日本の歴史教育の現状をどうお考えか？

【徐先生】

ある日本の専門学者が中国に来たり、東南アジアに行って中学校教科書を調べた。その学者によれば、凄い危機感を持ったということだ。日本とアジア各国の歴史認識に差が広がるのではないか。それは修復できなくなる可能性もあるのではと。日本の歴史教育が不十分と言われたが、同感だ。８０年代から教科書問題が出て、中日、日韓関係が微妙に変わった。この問題をどう解決するか、中日の学者は考えた。そして歩平先生がリードして、①中日の歴史学者が共同で研究して認識を統一しようとした。②中・日・韓の３カ国の学者が認識を統一

させて、一緒に教科書を作った。これは副教材として使われたらよいとされた。現在第２集まで共同教科書ができ、第３集を作りつつある。「未来に向けた東アジアの近現代史」だ。

これは民間の取り組みだ。０２年にスタートして、毎年、中・日・韓順番でそれぞれの国で「歴史認識と東アジア平和フォーラム」を開催している。日本の学者としては、俵儀文さん、笠原十九司さんなどが参加しておられるが、残念ながら日本の学者の参加が年々少なくなっている。

中日政府間の共同研究は０６年から２０１２年まで行なわれた。第２段階の計画をしようとしたが尖閣問題が生じて両国間が緊張し、研究はストップされた。しかし、民間の研究は進んでいる。北京大学国際関係学院と日本の財団と組んで研究している。

（井加田団員）

中国はどの位のボリュームで歴史教育をされているのか？

【徐先生】

抗日戦争を強調するようになったのは、ここ２，３０年で、８０年代の教科書問題が起きてからしっかりやるようになった。長い中国の歴史の中で１５年間は短い。抗日戦争のＴＶドラマや映画、小説が盛んになり、そこから国民が受け取ることも多い。こういう劇には結構事実でないことも多い。それらは「抗日神劇」（おかしい劇）と言われている。

（鎌田秘書長）

平頂山紀念館の展示物で、日本軍の蛮行の写真があったが、出所が書いてなかった。南京紀念館で別の写真が使われ、日本の右翼がそれを攻撃し、全てを「嘘」とキャンペーンしたようなことが行なわれないよう、指導された方がよい。

【徐先生】

よい意見をいただき感謝する。各紀念館に伝えたい。

（金子団長）

被害者の側からの視点に立った歴史観で研究してほしい。写真が事実かどうかだけの論議になってはいけないから。周恩来首相が日本軍国主義者と民衆を区分した言い方が、日本人の加害者性の意識化を妨げただけでなく、中国人の個人補償請求を遅らせたのではないか。個人の補償問題の研究はどの位進んでいるか？

【徐先生】

研究者は現在、場所・時間・真実性を研究している。正しい資料を出すよう頑張っている。我が研究所は海外から正しい資料を集める委員会を作った。そして委員会ができる前にも日本、米国、英国に資料集めに行った。日本では「支那事変画報」全号を手に入れた。さらに当時の日本兵の日記、写真集を集めてきた。米国では、７３１関連資料２万点位を買ってきた。できるだけ多く正しい資料を集め、それを基に正しい事実を教えたい。賠償請求は遅く、９０年代から始まった。国交回復時に放棄した賠償は国家間のものであり、研究者としては個人の問題は別と考える。当時は敏感な問題で、研究している

人は少なかった。９０年代、２０００年代の民間の請求に学者たちはあまり参加していない。今賠償を求める人は年配の人たちやその子どもや孫たちだ。学者は被害者と会っていないから、あまり注目していない。実際に会えば、彼らのことを知れば、学者たちも請求しなければという気持ちになるだろう。

私たちも努力したい

最後に金子団長は「長時間私たちの質問にお答えいただき感謝したい。教科書問題に端を発してようやく日中間で歴史問題を共通に研究し合ったり、意見交換できる環境になった。その時期は私たちも若かった。そういう若い人たちが歴史問題に関心を持ってくれるよう努力したい。日本では、徐先生のような年代の研究者が少ない。市民運動として、政治の活動として、歴史問題に市民が多く関心を持ってくれるよう努力したい」と挨拶し締めくくった。

（社民党新潟県連合　幹事長）

盧溝橋事件８０年の年に

友情あふれる旅の想い出

豊澤　正文

盧溝橋の佇まい

はじめに

村山談話を継承し、“２０１７年を日中友好年とする訪問団”の案内に興味を覚え、社会新報に問い合わせしたところ、門外漢の私でも良しとの事。参加することにした。出発前日、打合せの時に予期せぬ事態が発生。旅先でのレポート提出、これには参ってしまった。自由に書いてかまわないーの一言で、恥ずかしげもなく拙い感想文を書くことに、恐縮しながらも寄稿した事、お許しを願いたい。

悠久の中国にあこがれて、今回で４度旅をすることが出来、うれしい限りである。従来は観光目的がおもで、少し違った趣きではあるが、十分わたしなりに旅の目的を味わったと思っている。

北京は初めての訪問、期待が膨らんでいたが、朝から曇天、時おり小雨がまじり、あいにくの天気。それでも午前中の天安門広場、紫禁城は、傘もささずに見学することができた。学校の夏休みと重なって大勢の人に圧倒されるが、それにもまして広場のおおきさや、巨大建造物はあらためて中国らしさが実感でき、大満足である。

午後に天気は回復し高温注意報の中、抗日戦争記念館、盧溝橋と見学。日本軍が中国全土に戦線を拡大したきっかけの地に立ち、とりかえしのつかない過ちを犯した当時を思い起こす時、謝罪と不戦の誓いを強くした。大河、永定川にかかる盧溝橋、優雅な姿は、平和そのもの、又、近くの宛安城の壁には日本軍の砲撃の痕跡（ほとんど破壊されていない痕）があり、現在ののどかな景色と対比して、当時の生々しさが伝わってくる。

近年、日本のマスコミは中国に対し、対立感情を煽る報道が多々みうけられるが、平和な時代を維持する必要性を今、マスコミが求められている気がしてくる。言うまでもなく日本は、中国からの影響を強く受けた長い歴史があり、思考過程も変わりない土壌を共有、理解し合える条件がそろっていると感じている日本人は少なくない。友好交流の輪が広がり、人的交流が盛んになる事を願ってやまない。過去の歴史の反省の中で生まれた日本国憲法、特に他国との武力行使を永久に放棄する条文は、世代を超えて受け継がれていくべきと思っている。

対日感情の悪化が騒がれ、訪中前は少々不安を抱えながらの出発であったが、取り越し苦労に終わった。マスコミ報道が、いかに人の思考を左右するか考えさせられる。わずか６日間の旅で、特に印象に残ったことがある。昼食を摂ったどこの店も人で溢れていた。日本の大衆食堂か？我々日本人旅行者が入店しても気にかけるでもなく、敵意、差別を感じたことがなかった。中国人の大らかさ、懐のふかさを見た思いがする。本場中国料理を堪能、多数の客とまじって、世間話をし、食事談義に花を咲かせ、楽しいひと時を過ごすことができた。ありがたい。

旅を通して門外漢の私に、迷惑を省みず暖かく接してくれた、スルーガイドの劉さんはじめ訪問国の皆様、本当にありがとうございました。友情あふれる旅の想い出は、これからも忘れることがないだろう。

（宮城県）

2017年
～第三次村山談話を継承する平和の旅日程～

1日目（7 月 14 日）
羽田空港国際線・指定場所へ集合
中国国際航空にて北京経由ハルピンへ
着後、専用車でホテル（帕弗爾飯店崑崙大酒店）へ
ハルピン泊

2 日目（7 月 15 日）
◆731部隊罪証陳列館及び史跡視察
（731 部隊罪証陳列館、731 部隊関連遺跡、ガス製造所跡、凍傷実験室跡、小動物実験室跡など見学
◆幸存者証言聴取
その後、ハルピン市内見学（東北烈士紀念館、憲兵隊跡、ロシア街、松花江など）終了後、ホテルへ
ハルピン泊

3 日目（7 月 16 日）
午前、高速鉄道列車で瀋陽へ移動（2h30）
瀋陽着後
◆9・18歴史博物館見学、張作霖事件原状見学
◆撫順炭鉱見学
◆平頂山殉難烈士記念館見学
終了後、夜行列車で北京へ移動
列車中泊

4 日目（7 月 17 日）
早朝、北京駅着
◆中華全国青年連合会表敬訪問
その後、ホテル（西蔵大厦）へ
◆中国社会科学院訪問と交流
※歴史認識についての意見交換
北京泊

5 日目（7 月 18 日）
北京市内見学（天安門など）
◆抗日戦争記念館見学（盧溝橋事件跡含む）
※盧溝橋事件 80 周年
終了後、ホテルへ
北京泊

6 日目（7 月 19 日）
空路、羽田空港へ。着後、解散

資料

1937 年、中国侵略日本軍は「七七事変」（盧溝橋事件）を発動させ、中国の抗日軍は盧溝橋で全面的な抗戦の第 1 砲を打ち鳴らした。同年 7 月 7 日夜、盧溝橋で日本軍は中国の地方当局に通知せずに中国の駐軍基地付近でいわゆる軍事演習を行い、日本軍兵士 1 人が失踪したと偽り、北平西南の宛平県城（現在の盧溝橋鎮）に捜査に踏み入ることを求めた。中国守軍はこの不合理な要求を拒否したが、日本軍は中国駐軍に攻撃し、中国駐軍第 29 軍 37 師 219 団は反撃し、頑なに抵抗した。「盧溝橋事件」は中華全民族による抗日戦争の開始である。中国人民は血を流し、苦しい戦いを経て 1945 年 8 月 15 日にようやく日本の無条件降伏によって民族解放戦争の大勝利を収めた。写真は日本軍に占領された盧溝橋。

「中国網日本語版（チャイナネット）」
2014 年 7 月 7 日より

左：平頂山殉難同胞紀念碑の基には虐殺現場で焼かれた跡の灰が埋められているという。
上：７３１部隊跡にあるボイラー室の残存

【編纂記】

戦後 70 年を期して、あらためて「過去の事実と向き合う」作業をはじめた。2015 年の第一回目は「村山談話を継承し 2015 年を日中友好年とする訪問団」として開始し、2016 年も何とか 2 回目を実施してきた。今回、関係者の協力を得て「第三次・村山談話を継承する平和の旅」と略称し取り組んだ。

日本という国は１８６８年の明治維新以来、１９４５年８月まで 77 年間、戦争の歴史と言ってよい。そして、その後、戦争を経験しない稀有な国として歩んできた。そこには平和と生存の尊厳を「意識する」「しない」を問わず体内に宿し歩んだ７０年以上の歴史が刻まれてきた。それが今、変わろうとしている。

トランプ･アメリカ大統領の来日時の安倍首相の醜態（と言ってよい）は売国奴としか言いようがないが､彼は何に拠って立っているのか。税金を私物のごとく「兵器購入」として差し出し、「金」だけでなく、対「北朝鮮」危機をあおり日本国民の「命」まで差し出している。彼得意の「俯瞰」してみたら一目瞭然である。世界で嘲笑されているのに気がつかないのか。

今回の取組後、これまでご参加頂いた方々と相談し、「意」ある関係者の自主的な運動体として「村山談話を継承する企画委員会」を設置し継続していくことになった。「過去の事実と向き合う」ことを「現在」に刻み続けなければと誓う。

※なお、編纂にあたっては固有名詞に拘わる修正以外、報告者の使用文体のままとした。

2017 年 11 月 13 日

鎌田篤則（IFCC 国際友好文化センター理事長）